

7-7

演題	地域ケアプラザで行うひきこもり相談
副題	

8050 問題
重層的支援

法人名	社会福祉法人 若竹大寿会
施設名	横浜市すすき野地域ケアプラザ

発表者名 (職種)	土屋 環 その他
共同発表者	岩崎 洋斗
共同発表者	小藪 基司
共同発表者	
共同発表者	

都道府県	神奈川県
住所	横浜市青葉区すすき野 1-8-21
TEL	045-909-0071
FAX	045-909-0072
メールアドレス	susukino@wakatake.or.jp
URL	

今回の発表施設 またはサービスの 概要	地域ケアプラザは、高齢者、子ども、障害のある人など誰もが地域で安心して暮らせるよう、身近な福祉・保健の拠点として様々な取り組みを行う横浜市独自の施設。現在市内に 145 か所ある。
---------------------------	--

研究の目的、PR ポイント

「ひきこもり」やいわゆる「8050 問題」の課題に対応するために、地域ケアプラザで相談窓口を開設した。また年 1 回、本人、家族、支援者、地域住民がひきこもりについて共に学べる学習会を会場と YouTube 配信のハイブリッド形式で開催している。ひきこもり本人や家族が相談窓口の存在を知ったとしても、実際の相談に辿り着くまでには時間がかかると言われている。まだ相談実績は少ないが、灯りをともし続け、年齢や対象、相談内容等の制限をせずに丸ごと受け止める体制を継続することが大切だと考えている。

取り組んだ課題

ひきこもり状態の人数が全国で 100 万人を超え、中でも中高年層は推計 61 万人いるといわれている。特にここ数年で、一般的に 80 代の親と自立できない事情を抱える 50 代の子どもが社会的に孤立してしまう、いわゆる「8050 問題」が全国的な話題となっている。すすき野地区は横浜市青葉区の中でも特に高齢化率が高く、「ひきこもり」「8050 問題」の課題が潜在化している。ひきこもりの若者相談機関は複数あるが、40 歳以上を対象にした相談先が少なく「8050 問題」は制度の狭間にあり、埋もれてしまう課題といえる。これらの背景をもとに、「ひきこもり」「8050 問題」の相談を一体的に受け止める体制作りをすることになった。

具体的な取り組み

ひきこもり・生きづらさを抱えている人のための相談窓口「すすき野庵」を開設し、令和 3 年 10 月より毎週水曜日 13 時～17 時に相談を受けている。予約不要で、相談者には所長、地域交流コーディネーター、生活支援コーディネーターが対応している。相談ケースは地域包括支援センター職員とも共有し、必要に応じて区役所等の相談機関と連携を図っている。

年 1 回、本人、家族、支援者、地域住民がひきこもりについて共に学ぶ「すすき野庵学習会」を開催している。横浜市青少年相談センター、北部ユースプラザ、横浜市ひきこもり支援課、障害者基幹相談支援センター、親の会等多様な機関をゲストに迎え、支援機関の横のつながりを作っている。

活動の成果と評価

相談件数は月 1～2 件と多くはないが、担当圏域内外から様々な内容の相談が入っている。

【事例】

- ・約 20 年ひきこもっていた 60 代の女性を地域包括支援センターや病院、区役所等と連携しながらサービスにつなげた。
- ・生きづらさを抱えているという 50 代女性が、相談をきっかけにケアプラザの自主事業に参加したり、ボランティア活動を始めるようになった。

【相談者の声】

- ・40 歳以上の相談先が見つからず、これまでどこにも相談できなかった。やっと相談できる場所にたどりつけた。
 - ・ひきこもりの子どもの事を話せる場はあるが、親の苦しさを聞いてもらえる場がなく、話を聞いてもらえて安心した。
- 年 1 回の学習会では YouTube 配信を行うことで、全国からの視聴がある。アーカイブ配信は毎回 150 回を超える事からも、ひきこもりは全国的な課題であり普遍的なニーズがあることを実感している。

今後の課題

当初の予想通り、担当圏域からの相談件数は半数で、近所で顔が知られている場には相談に行きづらいことが考えられる。相談しやすさの工夫として、メール相談も開設したがまだ実績はない。担当圏域と年齢制限のない相談場所が各地に広がるのが望まれる。家族からの相談を受けることが多いが、本人支援にまでいきつかない難しさも課題の一つである。